

殿村遺跡とその時代—中世遺跡の整備・活用—

新潟県胎内市教育委員会生涯学習課 水澤 幸一

ただいまご紹介いただきました水澤といいます。よろしくお願いいたします。私は今年で役所に入ってから24年たちましたが、その間ずっと、合併して今は市になりましたが、小さな町の学芸員をやっておりましたので、ずっと史跡整備の担当ですね、発掘をして整備をするというのを繰り返して今に至ることになります。そういう関係もあって、ご縁がありましてこの殿村遺跡を見せていただくことになりました。毎年四賀の地に来させていただいております。私はほかの先生方のような大きな話はできませんが、最初の前半で各地の中世の遺跡の整備の状況を皆さんにご覧いただいて、写真ですけれども皆さんも一緒に旅に出た感じでご覧いただいて、「あ、これはいいな」というような整備がありましたら松本市教育委員会の方に言っていただいて、整備に活かしていくというようなことで進めていきたいと思います。で、後半には胎内市の整備とその活用の事例ですね、そのようなところをみていただければと思っています。ではスライドに入らせていただきます。

1 全国の中世遺跡の整備・活用

今日リストが皆さんのお手元にあると思いますが、北の方から順番に私が実際見てきた遺跡についてご覧いただきたいと思います。本拠地が新潟なので東日本の事例が多いのですが、西日本も少し入っております。まず北海道・東北からですね。北海道上の国町です。勝山城(図1)は、日本海に臨む丘の上に遺跡がありまして、お宮があるほうが墓地となっておりまして、ここに駐車場があります(図2)。手前の方に中世の居館が広がっておりまして、山の稜を尾根に沿って平場が点々とありまして(図3)、これが建物の跡(図4)、平面の表示ですね、復元整備はされておきませんが、平面形の整備をしております。

これは太平洋岸の函館^{しのりたて}の志苔館^{しのみか}ですけれども、これも湾に臨む四角い居館がありまして、まわりはお堀で囲まれています(図5)。ここもおとなしい整備ですね、あまり手を加えずに発掘して出てきた建物の中を平面表示して、あとは草刈りをしているわけです(図6)。そのような整備がされております。

浪岡城^{なみおか}ですね(図7)。今青森市になりましたが、もともと浪岡町という所で、これは模型ですけれども、



図1



図2



図3



図4



図5



図6

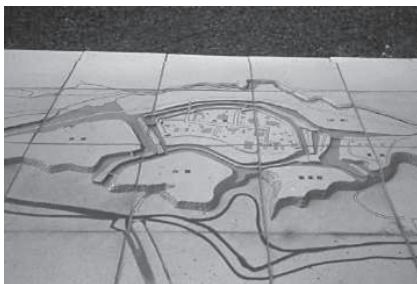


図 7



図 8



図 9

平場が五つくらいですかね。人が住む場所が重なっているような形ですね。こういう連なるかたちの城館が北の端と南の端—南の端というのは鹿児島県ですね—にありまして、北と南の特徴になっています。これは間のお堀を発掘しているところです（図 8）。これは整備されているところです（図 9）。今の時点でもっと整備が進んでいるところも結構あるんですが、少なくとも私の見た時点というところでご勘弁いただきたいと思います。ここでは柱を少し上にあげて、建物の跡を表現しています。いっぱい掘ったということもあるんですけども、非常にたくさんの陶磁器が出土します。これは日本海側の中世の特徴でして、日本海側の遺跡には非常にたくさんの陶磁器が入ってきます。少なくとも日本海側は当時の流通の中心であったというのが、こういう出土品から分かります。

これは八戸の根城^{ねじょう}という（図 10）、八戸ですから太平洋岸のはじっこの方になるわけですが、これが入口で堀に囲まれているわけですね。周りは堀が復元されています。中を全部復元するとこのような感じになるというのが、すぐ隣の八戸市博物館に展示されています（図 11）。この城館では、中の建物を復元してありまして、これは東北特有の曲り屋ですね、L 字形の建物（図 12）。そして馬屋ですね（図 13）、そういうようなものが復元されております。ここは珍しいというか、あまりないのですけども、主殿、一番大きな建物を復元してありまして、その中に家臣団が居並ぶ様子とか仏事をやる護摩を焚く護摩壇などがあります（図 14）。これは作業小屋の風景ですね（図 15）。いろいろなものが復元されています。

これは岩手の九戸城ですけども（図 16）、今の青森県の近いところでこういう曲輪が群集している形になる（図 17）。最後は豊臣軍によって落城させられたお城でありまして、お堀なんかはすごい深さをもっています（図 18）。秀吉の奥州仕置きの時に落ちた場所になります。

これも日本海に臨む秋田の脇本城ですね（図 19）。男鹿半島の付け根あたりにありまして、尾根の上に大きな平場がたくさんつくられております（図 20）。ここも発掘をしてこれから整備が進んでいくことになると思います。

東北で一番有名な遺跡といえば平泉ですね。これはお寺ですね。無量光院跡になります（図 21・22）。これも今発掘が進んでおりまして、池の様子とか建物の様子なんかがこれから明らかになっていくことと思います。で、平泉は町こぞって世界遺産になりましたので、サンクスやセブンイレブンなどのコンビニはおとなしい色調になっています。茶色にして町全体でこの世界遺産を盛り上げようということをやっておりまして、見習うべき点だと思います。で、平泉の柳之御所と呼ばれる館の発掘状況です（図 23）。こういう



図 10



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15



図 16

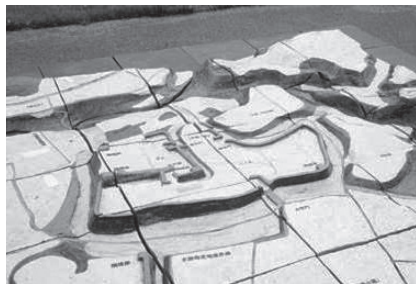


図 17

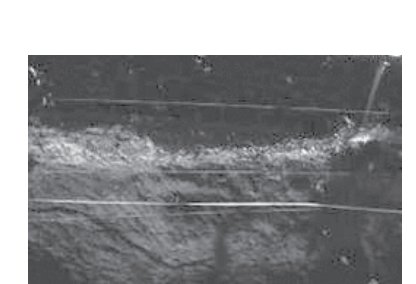


図 18



図 19



図 20



図 21



図 22



図 23



図 24



図 25

図 26



図 27



かわらけという（図 24）、この会場にも展示してありましたが、トラック何十台分のかかわらけがこの堀から出てきたということで、宴会ばかりやっていたということが分かっています。たまにこういう白磁の壺ですね、高級品で割れていないものなども出てきます（図 25）。これはたまたま井戸から出てきたので形が残っています。で、お米の種類を変えて田んぼのアートみたいなこともやっております、弁慶をあしらっていると（図 26）。先ほどの平泉の柳之御所ですね。いまこのような感じで平面の整備がなされています（図 27）。ここは残念ながら、平泉の浄土のテーマに沿わないとして世界遺産からはずされたんですが、平泉の方では追加指定を目指しているということです。

東北でも一番南の会津坂下の陣が峯城ですね。会津盆地の一番新潟県寄りの所ですけども、ここにもこんなに大きな土塁がありまして（図 28）、この平地の中を発掘しているところです（図 29）。ここは 12 世紀の、やはり平泉と同じ時代の遺跡でして、平泉だけではなく別の勢力も東北の南部にはあったということが分かっております。ここはまだ整備には至っておりません。これも発掘状況ですね、土塁を断ち割ってお堀のところを掘っている状況になります（図 30）。ここからもやはり白磁の四耳壺（図 31）とか水注（図 32）ですね、こういうものがたくさん出ておりまして、私は平泉も会津坂下も全部日本海側から入ってきたと思っておりますので、日本海ルートが 12 世紀くらいから活発に利用されていたというふうに考えております。

次に関東ですね。太田市の金山城というのがありまして、関東平野を一望できる非常に眺望のいい山の上につくられております。この城の特徴は石積みをいっぱい持っているということです（図 33）。殿村の整備のありかたの参考にできるのではないかと思います。ここは池も全部石でおおわれておりまして、日の池（図 34）と月の池（図 35）、2 つの池をもっております。本丸に登っていく道も全部石畳の道になっておりまして、両側は石の壁がおおっています（図 36）。関東の戦国時代のお城ですけども、山自体が石でできておりますので、石材には事欠かなかったでしょうけれども、織田・豊臣という時代よりも前の段階で関東にこういうものが造られているということが分かっております。

これは足利市、足利尊氏の先祖がいたところの菩提寺の樺崎寺です（図 37）。ここでは浄土庭園が出ておりましてその写真がないのですが、今その池の整備をしております。殿村が宗教関係の遺跡であればこういう庭園もどこかで出てくる可能性があるのではないかと思います。太田市には同じく先ほどの金山城のほかにも新田荘遺跡ですね（図 38）、新田義貞が旗揚げしたところです。うちの奥山荘と同じくいろんな地点を 1 つの名前で指定しておりまして、水源地ですとかお寺の跡でしたり、そういうものをひとつの名称で指定するという方法も今全国で 4、5 カ所あります。やはり各地域に一番自分たちの誇りとするところはお城が出てきます。



図 28



図 29



図 30

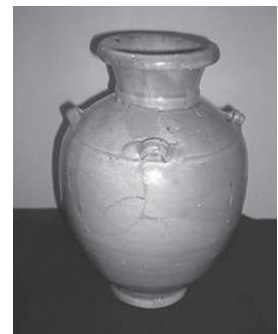


図 31

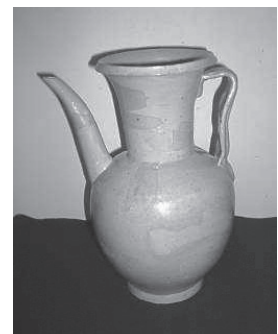


図 32



図 33



図 34



図 35



図 36



図 37



図 38



図 39



図 40



図 41

これはつくば市の小田城ですけれども（図 39）、筑波山のふもとにある館で何重も堀に囲まれた遺跡になります。そのへんもずっと発掘を続けておりまして、今だいぶ整備が進んできているということなので、また近いうちに見に行きたいと思っていますところです。

つくば市の小田城のすぐ横にある桜川市の真壁城です（図 40）。真壁氏がいたところですが、土塁が一部残っているところを発掘して、こんなふうに渡り廊下がついた建物があって（図 41）、これは能舞台と説明会では言うておりましたが、そのようなものも館の中にはあるということが分かってきております。

鎌倉は整備はお寺くらいしかやっていないんですけれども、これは発掘途中ですが、こういう竪穴の建物がありまして（図 42）、ここも湿地なので下に板を敷いて生活面を確保していたと（図 43）。そういうようなところも調査されているわけです。湿地なので水がついているところからも出ますけれども、堀の一部なども出ています。

中世の遺跡で一番たくさん出てくるものは、地域によっても違いますけれども、だいたいかわらけです（図 44）。宴会をしてそのまま捨てる、今でいう紙コップみたいなものです。そういったものがたくさん出るの



図 42



図 43

が中世遺跡の特徴になります。鎌倉はやたらものが出てくる場所で、何でもかんでも入ってきまして、鎌倉から一步外へ出ると全然違う世界が広がっていました。この白磁の四耳壺は、鉄絵を描いた中国からの陶磁器です（図 45）。



図 44



図 45



図 46



図 47



図 48



図 49



図 50

これは瀬戸ですね（図 46）。やはり京都とか鎌倉からは、普通の遺跡ではあまり見られないものがたくさん出てきます。これなんかは瓦質の鉢ですね（図 47）。殿村でも少し出ておりますが、鎌倉時代のものとは違うのですけれども、こういうのは都市的な遺物ですね。で、鎌倉といえば漆器ですね。湿地帯が多いものですから、当たるところに当たるともう漆器ががばっと出ます。黒いところに赤で紋様を描くものや、いろんな紋様が入ってくるのです（図 48）。これはスタンプを押したものです（図 49）、それから内側が赤いものです（図 50）。内側が赤いものは鎌倉というより南北朝の頃から出てくるものです。こういった漆器が低湿地の遺跡からは出ることがあります。

山梨の勝沼館です（図 51）。これもお堀に囲まれた内側を発掘しまして、こういうアスファルトで、カラー舗装で建物の規模を示すという整備をしております（図 52）。

飛騨市に入りましたけれども、江馬氏館跡というのがありまして（図 53）、発掘する前は田んぼというか、石がぽんぽんと見えますがこれが実は庭園の庭石になるわけです。そういうものが発掘前には田の中のあちらこちらに見られる状態であったのが、発掘で元の状態がはっきりしたということになりまして（図 54）、庭園が復元されています（図 55）。

北信越ですね。最初に上越、春日山城です。春日山は発掘をあまりやっていませんが、これがふもとにある一番大きな平場になりまして、御屋敷曲輪と言いますけれども、発掘した結果もう 10cm くらい下から礎石らしいものがちょこちょこ出てくる（図 56）。上杉謙信の居城で有名なんですけれども、謙信・景勝の後に堀秀治とかその後の越後城主が入ってきていますので、その辺の時代との関係性をはっきりさせなければいけないところになります。春日山城で唯一整備化してあるところがこのふもとの、通常登っていくところからかなり離れたところに監物堀というお堀がありまして、これが総構といわれる城下部分にあたります



図 51



図 52



図 53



図 54



図 55



図 56



図 57



図 58



図 59



図 60



図 61



図 62



図 63



図 64



図 65

(図 57)。その内側土塁があり、その上に柵が復元されておりますが、ここに物語館という施設があります。春日山城で山城はほとんど手がついていませんが、ここだけは整備が行われているということになります。なお、麓に市の埋蔵文化財センターがあり、立ち寄ってから山へ登られるとよろしいかと思います。

中野市の高梨館です(図 58)。だいぶ近づいてきたので行かれた方もあるかと思いますが、ちょうど桜が咲いていたころに行ったんですけれども、庭園も枯山水として復元されております(図 59)。周りがお堀で

すね（図 60）。中世の館が復元されています。

で、松代（図 61）。これは長野市がだいぶ長いことをかけて復元をしまして、ここ何年くらいで完成しまして、門なんかは復元されています（図 62）。来年大河ドラマで活用されたりするのかなと思います。

石川県の鳥越城という山城なんですけれども、櫓門を復元しておりまして（図 63）、中はやはりちょっと柱を高くして建物の柱跡を表現しています（図 64）。ここは一向一揆が籠った山城として有名なんですけれども、織田が取ったり取られたりということで、その変遷の文献とこの遺構の関係が注目されるところです。

七尾城です（図 65）。七尾城も石垣がいっぱいありまして、七尾城の上から見る七尾湾ですね、非常に眺望がいいところです。能登の守護がいた場所になりまして、石垣はその後の前田とかが入ってきますのでそっちの方の時期だと思いますが、大きなお城です。

そして、中世の遺跡で一番有名なのが福井市にあります一乗谷朝倉氏遺跡です。国の特別史跡となっておりまして、もう 30 年くらい発掘をやっていますかね。調査指導委員の小野先生もこの一乗谷で最初研究を始められまして、それから千葉の博物館の方に移られました。これは模型なんですけれども（図 66）、この川をはさんで町屋部分と領主の館があり、この上と下に大きな石垣で囲まれた入口がありまして、ひとつの戦国の城下町がまるまる残っているというほかにはない遺跡になります。これがその谷の入口をふさぐ土塁です（図 67）。これが朝倉館を正面から見たところ、信長に焼かれてこの上にもものすごい火事の跡が残ったもので下が非常によく残っていたということで整備がされております（図 68）。今のところを復元するとこんな模型になるんですね（図 69）。これも京都風のハレの空間と日常生活の空間という場の使い分けがなされています。一乗谷には近くに^{しやくだに}笏谷石という青い凝灰岩が取れるので、そういうものを多用しております（図 70）。また、屋敷の際に全部石垣、石積みがされています（図 71）。庭園も先ほどの館の上の方にいくつか

並んでおりまして、これは史跡だけではなくて名勝という指定もかかっております（図 72）。ここは非常に広いので、一日いても時間が足りないくらいいろんなものがあります。町屋部分ですけれども、家臣団の屋敷とか町屋部分の発掘



図 66



図 67



図 68

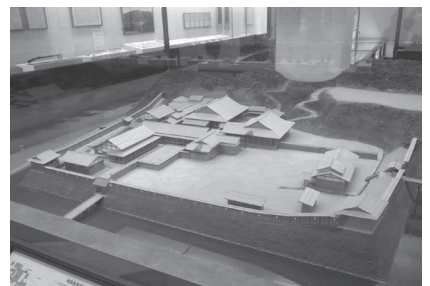


図 69



図 70



図 71



図 72



図 73

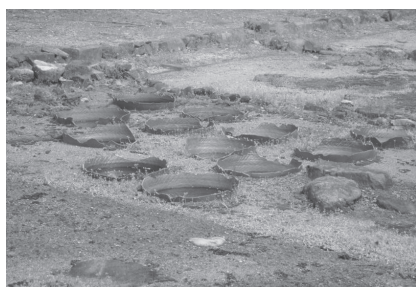


図 74



図 75



図 76



図 77



図 78



図 79



図 80



図 81



図 82



図 83



図 84



図 85



図 86



図 87

調査がこんな状況で（図 73）、職人が油か紺屋さんか分かりませんが、こういう甕をいっぱい埋めているところの復元などもされております（図 74）。これがその町屋部分です（図 75）。ストリートをはさんだ両側に武家屋敷と町屋が並んでいるところの写真になります。これは模型ですけども、これが実際に復元されている町屋部分になります（図 76）。これは裏側から見たところですね（図 77）。だいたい裏側に井戸があってトイレがあって、そして建物があるという基本セットになっています。これは陶磁器屋さんです

かね（図 78）、このようなところも町屋の中には復元されております。出土品もやはり戦国大名クラスなので色んな貴重なものが数十万点出土しております。

これは勝山市の白山平泉寺はくさんへいせんじですね（図 79）。先ほど竹原さんの話にもありましたけれども、平たい石で石畳の道をつくって周りを石垣で固めるという僧坊が所せましとあります。三千坊とか言われておりますので、それくらいたくさんのお坊さんがいた屋敷が並んでいました。ぜひこの白山平泉寺と一乗谷とセットでご覧になればこれからの整備にかなり参考になるのではないかと思います。

今度は近畿の方に入っていきます。これは安土城です（図 80）。滋賀県にありますけれども、これが発掘で出てきた石段ですね（図 81）。江戸時代以後にどんどん改変されたんですけど、県の発掘によってまっすぐに下から上に上がっていく道路がみつかっておりまして、天守台なども残っています。近くにありますが滋賀県立安土考古博物館には関連する展示がされています。これは安土城のふもとの石垣です（図 82）。

伊勢の北畠氏館です（図 83）。信長が子供を養子に入れたところで、今はそのあたりが神社になっていますけれども、庭園とか館の一部が神社境内として保存されています（図 84）。館を復元するとこんな感じですね（図 85）。建物がぎっしりとあったというふうに想定されています。

京都の東福寺ですね（図 86）。これはただのお寺の写真ですが、東福寺は中世の頃からありまして、貿易に関わっていたということが分かっています。これは韓国の南の方で海底からみつかった新安沈船という沈没船から出土した遺物なんですけれども（図 87）、これらは東福寺の堂宇を修理・再建するための荷物として積まれていたのが韓国の沖で沈没したことが分かっておりまして、これらから日本と中国、東アジアその地点が海でつながっているということが分かるかと思っています。

これはちょっと時代が違いますが、奈良の平城宮です（図 88）。天皇がいた内裏を最近復元しまして、たくさんの人が今訪れていますが、むちゃくちゃでかいですね。こんなのをつくりまして総工費何百億ですかね。とにかく奈良の平城宮に行かれたらぜひ立ち寄っていただけたらと思います。それから朱雀門です（図 89）。こういうものも復元されておりまして、これをつくるにあたっては 2 分の 1 スケールで実際に組んでみてそれからつくっています。ほかにも先ほどの大きな復元ではなくて、おとなしい復元ですね。上の建物がない土台だけの復元です（図 90）。小さな建物の復元とかいろいろな整備がなされております。

奈良の西大寺です。近鉄の西大寺駅の近くにありますのでぜひ奈良に行かれたときには寄っていただければと思います。お寺の場合にはこういう築地塀ですね（図 91）。土を積んでつくっていく塀がありまして、大きなお寺でしたらこういうものが伴ってくる可能性があります。奈良は、お茶をたてる時に鉄瓶を置く風炉というものの一大産地でありましたので、そういうものがこちらに来ている可能性があります（図 92）。

これは和泉佐野市というところにある日根荘ひねのしょう絵図といいまして（図 93）、日根荘の荘園のいろいろな地点



図 88



図 89



図 90



図 91



図 92

をばらばらに、広い範囲全部ではなくてポイントポイントを指定するという形で指定されているところ
 です。こういう神社(図 94)とか長福寺跡とかいろいろな地点が一括して日根荘遺跡として指定されてい
 ます。こういう別々の地点を 1つの名前で指定するという方法もありますので、こちらもそのようなことを考え

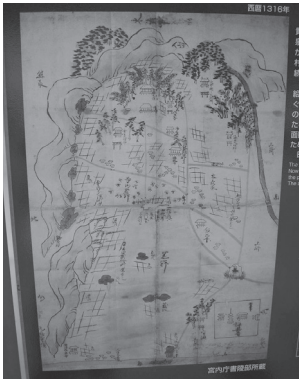


図 93



図 94



図 95



図 96



図 97



図 98



図 99



図 100



図 101



図 102



図 103



図 104



図 105



図 106



図 107



図 108

られるといいかもしれません。

堺も千利休で有名ですがけれども、町衆が力をもっていましたのでいろいろな高級な陶磁器がたくさん入ってきております。史跡としては今の市街地と重なっておりますのでなかなか残せないのですけれども、出土しているものを見れば、大きな都市であったということが分かります。茶の湯の道具もいっぱい出てきます（図 95～97）。

中国地方です。これも先ほど話がありましたけれども、東広島^{きつかわ}の吉川元春の館です（図 98）。前面に石垣がありまして（図 99）、中に井戸跡などが復元されております（図 100）。戦国期の終わりごろになりますとこういう石垣がたくさん出てきますが、殿村のような 15 世紀段階の石垣となると非常に少ないということになります。

これも北広島の万徳院ですね（図 101）。先ほどの竹原さんの話にも出てきましたが、こういうストリートがありまして前面に石積みがある（図 102）。で、湯屋ですね（図 103）。当時のお風呂＝サウナが復元されておりますが、これは予約をすると体験できるそうです。池も復元されてありまして（図 104）、ここは私が行ったときはイノシシがたくさん芝生を荒らしておりまして、ぼこぼこに掘り返されていました。このような獣害は、深刻です。これは、史跡整備の時に考えなくてはいけないということになります。

これは島根の出雲大社です（図 105）。出雲大社も発掘をやりまして柱穴が出てきたのはご記憶にあるかと思いますが、これが今出雲大社の横にある博物館の入ったところにある大きな柱ですね（図 106）。人の大きさを見ていただけると分かると思いますが、この 3 つを大きな金の輪っかですなご合わせて、そびえたつような柱を立てていたと。今まで嘘だといわれていた非常に高い建物というのが本当だったということが分かったわけです。これは鎌倉時代の話なんですけど、もっと前からこういう物が作られていたということが発掘で分かっています。これが復元模型です（図 107）。いろいろな案があります。

安来^{やすき}の富田城^{とだ}です（図 108）。月山^{がつさん}富田城。毛利元就が最後まで落とせなかった城です。最終的には滅びるのですけど、こちらへんも石垣があります（図 109）。ふもとの河原から陶磁器が出まして、これもまた日本海側ですね。非常にたくさん陶磁器が出ます。中国産の陶磁器です（図 110）。

浜田市というところでは、これはほとんど 12 世紀、13 世紀でちょっと古い時代ですがけれども、国府という昔の役所が石見^{いわみ}国の役所であったことから、中国陶磁器が入ってきています（図 111）。もう石見となれば博多から近いのでそこから直接入ってくるということになります。

草戸^{くさど}千軒^{せんげん}町は広島^{ひろしま}の福山市です。ここは瀬戸内の港町です（図 112・113）。

大内氏です。山口の大内氏ですけれども、発掘しているところで、お寺の中の一画ですね（図 114・115）。すぐ横がお墓になっているので整備していくのも大変だと思うのですが、凌雲寺ですね（図 116・



図 109

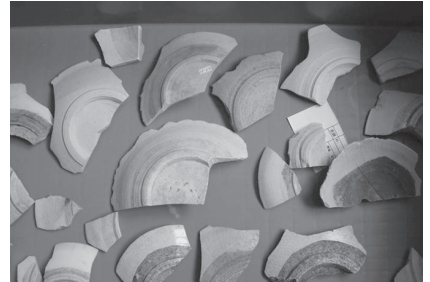


図 110

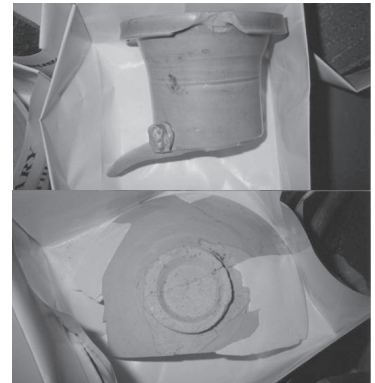


図 111



図 112



図 113

117)。こういう石垣で囲まれたお寺も見つかっています。

九州です。律令期に有名な大宰府は、^{みずき}水城という平野をずっとつなぐ土塁ですね（図 118）。福岡平野からちょっと奥に入っていったところに土塁を築いて防御を固めていると。で、その大宰府には律令時代以来の役所がずっとあったということになります（図 119）。その一連の大野城の一部でこういう石垣がありまして（図 120）、これは天智天皇の時代につくられたと言われておりますので、時代が7世紀という古い時代のものですが、こういうものが古くからあるということになります。次いで先ほどの大宰府の政庁跡ですね（図 121）。こういう礎石立ちの建物がずっと、これは回廊ですね、中に役所の建物があるということが分かっていますが、だいたいはいくつのおとなしい整備ですね（図 122）。どこにどういふ建物があったかを表示しているだけの整備になります。太宰府天満宮に行かれた時にぜひこちらの方も寄っていただければと思います。

それから鴻臚館です（図 123・124）。これもちょっと時代が古いんですけども、福岡のダイエーホークスの球場の下から出てきまして、今球場を確か動かしたんじゃないかなかったですかね、これを残して。迎賓館



図 114



図 115



図 116



図 117



図 118



図 119



図 120



図 121



図 122



図 123



図 124



図 125

です。外国の、中国とか朝鮮の使節がきたときに接待をする場所ですね。そういうものが福岡にはあります。時代は平安時代くらいが主なところになります。

元寇の防塁です（図 125）。鎌倉時代に 2 回モンゴルから攻め込まれておりますので、1 回目と 2 回目の間にこういう石垣を築いて防御をしているということになります。

博多は言わずと知れた国際貿易港ですので、中国からの陶磁器が腐るほど出ます（図 126・127）。いろ



図 126



図 127



図 128



図 129



図 130



図 131



図 132



図 133



図 134



図 135



図 136



図 137



図 138



図 139



図 140

いろな産地ですね、これはタイですし、タイとかベトナムとか中国・朝鮮だけではなくそのほかの東南アジアからの土器も博多からは非常にたくさん出土しております。

肥前名護屋城です（図 128）。これは秀吉が朝鮮半島に攻め込んだ時に築いた城です。肥前名護屋城が一番メインの秀吉がいた場所ですけれども（図 129）、その周りにも、これは上杉の陣屋と言われているところですが（図 130）、こういう各大名が築いたものが点々としておりまして、これらもいくつかが発掘をして整備をしている状況になります。

最初に青森のところでもいいました鹿児島の知覧城です（図 131）。こういう曲輪がばらばらにありましてその間をお堀が走っている。鹿児島はシラス台地ですので火山灰がいっぱいこのお堀を埋めていると。人と比べてもらいますと 3 m 以上お堀が埋まっているというのが分かります（図 132）。

最後は、琉球になります。琉球には、琉球凝灰岩を使ったお城（グスク）がたくさんあります。首里城ですね（図 133）。これは戦争で、沖縄戦で焼けたのでこれも何年か前に全部完成しまして、今行くところいう修学旅行生がいっぱいいまして、すごく混んでいます（図 134）。まったく石で囲まれた城でありまして、これなんかも発掘を当然しているわけです（図 135）。発掘を通してそれに基づいて上の石垣を復元するとい

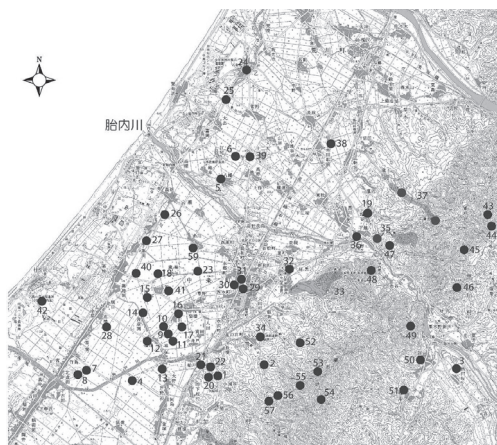


図 142

うことです。ちょっとこういう四角い防空壕の跡ですね（図 136）。別に沖縄だけではないんですけども、沖縄にはたくさんあります。「玉庭」と書いて「たまうどん」と読みたいんですけど、これは琉球王朝の歴代のお墓です（図 137）。^{なきじん}今帰仁城、とにかく石垣を縦横無尽に使った石垣があちらこちらに見られます（図 138）。糸数城（図 139）、座喜味城跡（図 140）。それから整備という面で見るとあまり関係ないんですけども、こういう^{せーふあうたき}齋場御嶽という沖縄の信仰に関わる遺跡です（図 141）。巨岩のところそういう儀式を行った場所がありまして、沖縄を考える上で重要な遺跡があります。沖縄は当時中国と直接



図 141



図 143



図 144



図 145



図 146



図 147



図 148

交易をしておりましたので、中国の陶磁器が非常にたくさん出ます。中国から直に來ますのでいろいろなものがあります。

ここまでで前半の部分、各地の遺跡を見ていただきました。聞いてもわからない、見ないとわからない部分がありますので、今の中で「これは」というものがあればぜひ現地をご覧になっていただければと思います。

2 奥山荘城館遺跡の整備と活用

これからようやく私のおります胎内市、奥山荘城館遺跡の整備と活用の状況を聞いていただきたいと思います。胎内市というのは中条町と黒川村がくっつきまして、真ん中を流れるのが胎内川になります。そこから胎内市という名前になりました(図 142)。これが日本海です。日本海の海岸線が 20km くらいあります。点の落ちているところが中世の集落であるということになります。奥山荘城館遺跡というのは 12 地点ありまして、あちこちが指定されております。12 地点の内一カ所だけが隣の新発田市に入っておりまして、胎内市としてはほかの 11 地点を順番に発掘をして整備をしていくというのが私の仕事になっています。海岸に面した奥山でないところをなんで奥山というのかといいますと、この奥に見えます山全体が奥山と呼ばれておりまして(図 143)、おそらくこのあたりから開発が始まりまして平場のほうに出てきたということが考えられております。

まず 1 つめです。古館館跡(図 144)。ここもお寺が入っておりましてこの境内地は手がつけられないんですけど、周りの土塁がよく残っておりまして、空いているところを発掘させてもらった結果こういうお堀の跡が出てきました(図 145)。方形屋敷などが出てきて、これ実は土塁が折れ曲がっていくんです。こういう形は江戸時代のものではないかと言われていたんですが、発掘の結果江戸時代のものは全然出なかったんで、15 世紀の中世の後半の遺跡だということが確定しまして国の指定に追加してもらったという経緯があります。

^{とっさか}鳥坂城という山城ですね(図 146)。ふもとに館が 3 つあります。奥山荘には、領主が 3 人いまして、私がもといいた中条町は中条氏です。その中条氏から中条町という名前ができたんですが、まずその殿様が戦国時代に使った山城と館になります(図 147・148)。これは現在土地の買収を進めているところでして、発掘調査にも入ったばかりで、これから整備を行っていく場所になります。このあたりに館があって、この段丘の際にも館があるということが分かっています。

それから整備が終わった 2 つの史跡です。坊城館と江上館、2 つの館の整備が終わりまして、今公開しておりますが、最初 11 年かけてこの江上館を発掘して整備をしました。その後この周りに団地がつくられる計画があって発掘していたところ、ここで室町時代の江上館に先行する鎌倉時代の地頭の屋敷が出てきたということで、急きょ文

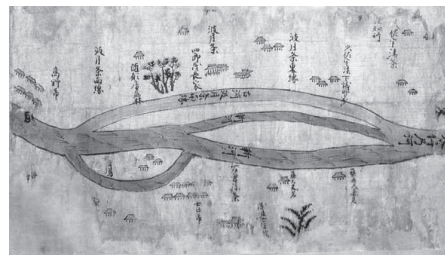


図 149



図 150

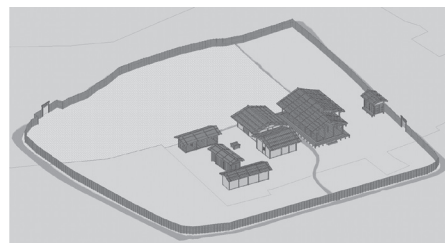


図 151



図 152

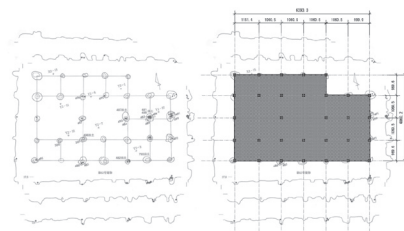


図 153

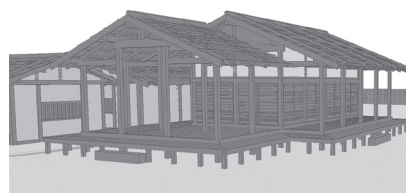


図 154



図 155

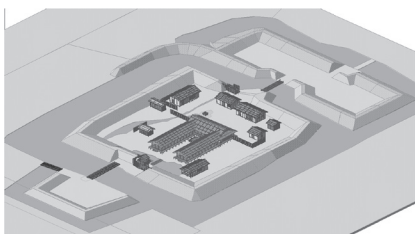


図 156



図 157



図 158



図 159

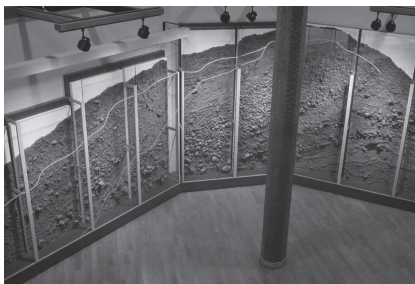


図 160

化庁と協議しまして残すことになりました。これは開発をやめて保存したという事例です。殿村遺跡も学校をつくるのをやめて残したという非常に珍しい事例ですので、同じような状況になります。それで、これが胎内市が持っている国の重要文化財になっています 700 年くらい前の中世の絵図「波月条絵図」(図 149)でして、ここが胎内川です。胎内川の両側に地頭の屋敷が 2 つあります。この地頭の屋敷が描かれている実物が坊城館から出たということで保存になったということです(図 150)。復元するとこのような感じですね(図 151)。西側部分は途中で保存が決まったので、発掘を最後までやっていないのでよく分からないんですが、広場があって、馬場ですね、馬を走らせる場所がありまして、この東側寄りの方に建物がたくさん建っているという状況です。こんな状況で整備をやっておりまして、実は今年の春から公園としてオープンしています(図 152)。これは建物跡が見つかったものをこういうふう

に整備するという図面です(図 153)。先程見ました絵図の上にこういう 2 棟の—この四郎茂長家というのが地頭です—この地頭の屋敷が描かれているもの(図 154)と同じような建物がこの坊城館から出まして、鎌倉後期の地頭がこの場所にいたということが分かってきました。

そして室町時代に方形居館という四角い土塁に囲まれた空間に引越すわけです(図 155)。先程見てもらいましたように、鎌倉時代にはこういうまわりを囲む土手は見つかっていません。室町時代になってこういう土手を回すということが分かっております。これも復元しますとこんな感じです(図 156)。北と南は両方堀がめぐっているのが馬出用の曲輪がありまして、真ん中に領主の空間があると。周りは平場なので水堀に囲まれているということがわかっています。これが発掘している状況です(図 157)。土手は 3m の高さが残っておりまして、これはお堀を掘った時の状況です(図 158)。この後に見えますのが橋脚でして、橋のかかっていた地点が見つかっています。整備はこれを元に復元したわけです。隣に歴史館というガイダンスの施設をつくりまして(図 159)、その一面の壁には先ほどの土塁をはぎ取ってきたものを展示しておりまして、実際の土手の大きさを体感していただくということになっております(図 160)。そして先程発掘した橋脚のあった場所に橋を架けまして(図 161)、櫓門もつくりました(図 162)。これはつくつてすぐの写真なので、それから 10 数年たっておりますので現在はだいぶ味が出てきております。実際の櫓門の上には当然屋根がついていると想定されるのですが、これは文化庁が根拠のないものはつくってはいかんということで、2 階部分はつくってないわけです。あくまでも想像ではなくて発掘調査の成果に則って復元するというのが史跡整備の基本になります。門をくぐるとこんな感じですね(図 163)。白い砂利はハレの儀式をやる空間となっております。塀でしきられた向こう側が日常生活の場ということになります。これを CG にするとこんな感



図 161



図 162



図 163



図 164



図 165

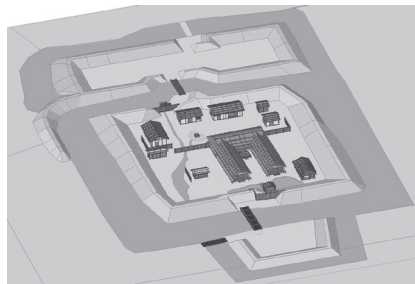


図 166



図 167

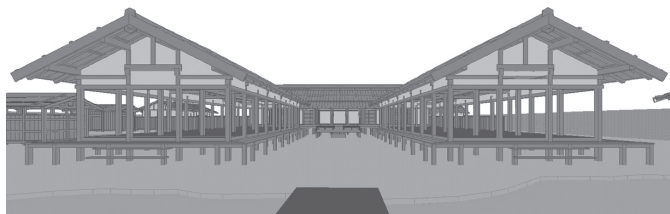


図 168

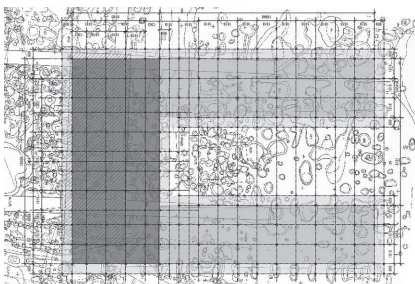


図 169

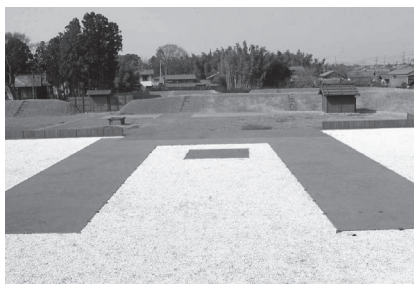


図 170



図 171

じで、入ったら正面に儀式用の建物が建っていると（図 164）。これを建てるとなると数億円というお金がかかりますし、根拠のないことはあまりできないので、こういう大きな建物などは復元できないということになります。しかし根城なんかは、大きな建物を復元しておりますので、それは文化庁が納得してくれればできるということになります。これは、発掘状況ですね（図 165）。3 年分の発掘したものをつなぎ合わせた図面です。実はちょっと掘りすぎていまして、後で文句を言われたんですが、掘らないとわからないので掘りました。今は多分こういう掘り方はだめだといわれると思います。そしてこの柱穴から復元して、ぜんぶで 60 棟の建物が出ております。その内一番最盛期の 15 世紀後半の建物配置は、このような感じになると思っています（図 166）。これは発掘しているときの写真です（図 167）。作業員さんがずっと並んでいますが、これが柱のあった場所です。こっちも大きな柱が続いていきます。これが儀式用の建物になりました、一番真ん中にこういう建物があるということになります（図 168）。これがその設計図です（図 169）。柱を拾った図面になります。今はこういう状態で整備をしております、ハレの空間は白い砂利のところにカラーアスファルトで、塀をへだてた日常生活の場は芝張りで色も普通の色のアスファルト舗装です（図



図 172



図 173



図 174

170)。蔵を1棟復元していますが、掃除用具などの道具が入ってしまっていて実際蔵として活用しております。ここにはずっと水溜めがありまして、実際水をはると使い勝手が悪いので青い砂利を敷いて水を表現すると。お堀につきましても正面の復元したところ以外はこの青い砂利で水を表現するという手法で整備をしております(図171)。これは先ほどの蔵(図172)と今休憩所として使っておりますけれども(図173)、これはイベントの時に非常に重宝します。音響機械とかをこの屋根の下に入れてイベントをやるわけですが、この戸は冬場は締めて戸をはめるという形で作っております。この建物はあまり大きくないんですが、これ1棟を復元するだけで2千万円かかりましたので、普通の家が1軒建つくらいのお金ですね。なんでそんなにお金がかかるかというと、昔の技法で作っております。表面をチョウナという今は使わない昔の道具でつくったり、屋根も板を割ったり、そういう人の手間が非常にかりますので当時の建物を復元するには非常にお金がかかると。それは松本市さんも松本城などでお分かりになると思います。この館からは、非常に立派な青白磁の梅瓶^{めいびん}という壺が出土しました(図174)。これは、発掘でばらばらで出てきたものを復元したものです。かなりパーツがそろっておりまして、上から下までつながっております。それから茶壺といった高級品が出土しています(図175)。トイレは野外にこのようなシックな感じで景観に配慮したものを作っております(図176)。それから青磁、これも中国からもってきたものですね(図177)、青磁(図178)とか白磁(図179)とか舶載天目茶碗(図180)です。なぜか越後は全国で琉球に次いで中国の天目茶碗がたくさん出ているところになります。日本海にそういうものがたくさん入ってくるということが出土品から分かります。

これまでが奥山荘の史跡整備の話でして、これから活用部分を少しお話します。最近年々大規模になってきまして、奥山荘の歴史を先ほどの館^{はんかく}を使って板額という、ちょっと時代は違うんですが中条ゆかり



図 175



図 176

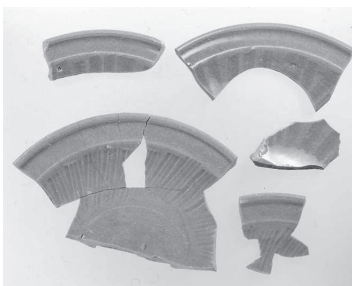


図 177



図 178



図 179



図 180

の姫君のイベントをやっております。最後は、長野のお隣の山梨県の甲斐の国へお嫁に行くのですが、鎌倉幕府と戦うという勇猛なお嬢さんが奥山荘におりまして、それを継承して史跡でイベントを毎年9月にやっています。ポスターもだんだん立派になってきました（図 181）。このお姫様が戦ったのが1201年、約800年前、鎌倉時代の初期のことになりまして、その関係でこの鎧をつくりまして（図 182）、最近では馬も出てきまして（図 183）、かなり本格的なものになっています。ただしこの鎧は、段ボールでつくっています。非常に軽くて暖かくていいんですけど、汗をかくと破れてくるというのが難点ですね。

こういう女性を顕彰しまして、まず町の中央の通りから武者行列で史跡まで行列をするというところから始まります（図 184）。そして子供たちも段ボールの鎧を着て参加をするのですが、胸のシールなんかを子供たちにつくってもらって参加してもらうというようなかたちです（図 185）。

会場の外には出店もできまして、ここ数年は2000人を超えるお客さんに来てもらえるようになっています（図 186）。宴の始まりは、一応中秋の名月ということで夜にかけてやるイベントになります。太鼓の演奏ですね（図 187）。で、先ほどの復元したアスファルトの舗装をしてあるところにお客さんに座っていただいて、こういうステージをつくと（図 188）。仮設なので史跡の地内でも全く問題はありませんので、ここをメインの通路として活用します。先ほど言いましたあの建物ですけども、そこに音響の方が入ったり、着替える場所にしたり、そのように建物を使っています（図 189）。山梨にもらわれていったお姫様が里帰りしたという設定です。この門から入ってきます（図 190）。で、先ほどのように太鼓（図 191）とか獅子舞（図 192）、よさこいなんかをやってもらったり、史実に基づく演劇も毎年やっています。また板額御前コンテストも2年に1回やっておりまして（図 193）、ここで選ばれた人たちに2年間いろいろなイベントがありますので、そういうところで活躍していただくということでやっています。これは今日使わせていただいた写真ですけども、いろんな配役がありまして、実際矢は飛ばさないんですけども弓を使って、館の中で演劇をやってもらっています（図 194）。これをやっている団体は板額会という一般の団体ですね、そこに生涯学習課が協力してテントとかを使ってやっているわけです。そういうやり方ですとやっておりまして、年々たくさんの方が来てくれるようになりました。史跡を使っただけならばそれが一番いいと思いますので、そのようにしています。

このように私が実際に行ってきた遺跡を見ていただいたり、それから活用のしかたですね、これはいくらかでもあると思いますからその一例を今回みなさんにご紹介させていただきました。今後殿村遺跡をどのように整備して活用していくかということは、皆さん地元の方次第だと思いますので、何らかの参考になればと思います。それではこれで終わりにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。



図 181



図 182



図 183



図 184



図 185



図 186



図 187



図 188



図 189



図 190



図 191



図 192



図 193



図 194

講師プロフィール

水澤 幸一（みずさわ こういち）氏 新潟県胎内市教育委員会生涯学習課文化財係長

1967 年、滋賀県に生まれる。1991 年立正大学大学院文学研究科修了。以後、中条町教育委員会勤務、合併を経て胎内市教育委員会史跡奥山荘城館遺跡の整備にあたる。2008 年に新潟大学より博士(文学)授与。2016 年現在、現職。

専門は歴史考古学。土器・陶磁器、城館、石造物等から、中世社会の解明に取り組む。

著書に『奥山荘城館遺跡』（同成社 2006 年）、『日本海流通の考古学』（高志書院 2009 年）、『仏教考古学と地域史研究』（高志書院 2011 年）などがある。

